

無花果

liliput / aliliput

いつもの時間に帰宅すると今日子が帰ってきていた。あの夜、今日子が家を飛び出してから一週間目。今日子の姿を見るのは随分久しぶりに感じる。

今日子は無表情で台所の床にしゃがんでいた。あの夜、あんなに泣き喚いていたのが嘘のように静かだ。僕は今日子を刺激しないよう、努めて何気ない風に声をかける。

「お帰り、今までどうしてたんだ？結構心配したよ」

今日子は無言でゆっくりと首をこちらに向けた。その時初めて気づいたのだが、台所中に赤ワインとスパイスの匂いが充満している。今日子は今まで料理をしていたのだろうか。

今日子はしばらく無言でこちらを見ていたが、やがてすっと立ち上がると、右手を突き出してきた。

「返す」

「え……？」

僕は咄嗟に突き出されたモノを受け取った。今日子は呆気にとられた僕を尻目に、そのまま脇を抜けて玄関を出て行った。玄関扉が重そうに閉まる音で、僕はようやく我に返った。

「……？」

突き出されたモノをしげしげと眺める。それは手のひらに収まるサイズの瓶で、中には赤黒い汁に半分漬かった勾玉のような塊が入っている。今日子の得意メニューで僕の大好物、無花果のワイン煮だ。

今日子、これを作ってたのか？

台所を見ると汚れた行平鍋がガスコンロの上に乗っていた。鍋の中には瓶の中の汁と同じ液体が入っている。濃厚なワインとシナモンの匂いが漂ってくる。僕は瓶を握り締めた。まだほんのり温かい。作りたてのようだ。

何だか疲れて、台所の椅子に腰を下ろした。今日子に罪悪感が無い訳ではないが、罪悪感を感じることも自体がしんどい。今日子はせめてもの置き土産のつもりで、僕の好物を作ってくれたのだろう。その気持が嬉しくもあり、恨みがましいとも思う。

考えてみれば、今日子と暮らすようになってから4年も経っていたのだ。今日子は僕をととても愛してくれていたし、僕も今日子に優しく接していた。具体的な話が出なくとも、今日子は僕と結婚するものと信じていたに違いない。勘違いさせたことについては、僕は本当に悪いと思っている。

しかし、今日子にも悪い部分はある。今日子は献身的すぎる女だった。忙しいだろう看護婦の仕事の続けながら家事全般を取り回し、僕には疲れた顔一つ見せなかった。僕の帰りがどんなに遅くとも、笑顔で僕を待っていてくれた。

我ながら勝手だとは思いますが、今日子のそういうところが重荷だったのだ。

僕が今日子に隠れて麻奈と付き合いだしたのは、そういう理由もあった。

麻奈は今日子とは正反対だった。約束にはルーズですぐに拗ねるし、しょっちゅう逆ギレする。でも麻奈と居る時は、今日子と居るときとは違って寛いだ気分になった。

今日子は麻奈と遊んで遅くなった夜も、文句一つ言わずに笑顔で僕を出迎えた。僕が晩御飯は要らないとぶっきら棒に言った時も、少し悲しそうな顔をしただけで小言一つ言わなかった。それが僕を更に苛立たせた。

自分ばかり聖母のような面しやがって。

あの夜、今日子が出て行った夜。今日子の誕生日だった。

今日子が珍しく「話があるから早く帰ってきて」とメールを送ってきた。帰宅すると、いつになり豪勢な料理が食卓に並べられ、ニコニコ顔の今日子が座っていた。僕がケーキ一つ、花束一つ持って帰ってこなかったことには、まるで気づかない様子だった。

「あのね英彦、実はね――」

今日子が笑顔で切り出した。

きた。

誰がお前みたいな、偽善者の女なんかと。

「ちょっと待ってくれ今日子、実は」

僕は先手を打つことにした。

僕が麻奈のことを捲くし立てると、今日子はじきに、普段の様子からは到底考えられないくらい暴れだした。獣のように泣き、喚き、暴れる。そんな今日子を見て、僕の心はどんどん冷静になっていった。思ったよりあっけないな、と思った。

そして今日子はそのまま、バッグだけ持って家を飛び出していった。それから一週間、さっきまで戻ってこなかったのだ。

心配じゃなかった、と言えば嘘になる。自殺でもされたら後味が悪い。今日子の携帯にメールや電話をし、共通の友人にも連絡をとって見たが、今日子の行方は分からなかった。それがひょっこり帰ってきたかと思うと、またたちどころに居なくなってしまった。

ま、生きてたならいいか。

今日子はいい女だ。すぐに代わりの恋人も見つかるだろう。心配は要らない。

僕は手にしていた瓶を見た。この無花果はあまり日持ちがしない。作りたてのうちにさっさと食べてしまおうと、僕は蓋を開けて中身をつかみ出した。

ぱくん。

無花果は思いの外つるんとしており、僕は思わず一飲みにしてしまう。

最後の一つだからゆっくり味わって食べたかった、と、少し惜しい気持ちになりながら、僕は瓶を流しに片付けようと立ち上がった。

そういえば「返す」って何のことだ？

今日子が瓶を渡すときに発した不可解な言葉。一瞬疑問符が頭に浮かんだが、瓶を見てすぐに思い直す。この瓶は料理が好きな今日子に、僕が以前雑貨屋で買ってあげた物だ。そのことだろう。

僕は瓶を流しに置いた。

その時、不意に携帯が鳴った。

今日子の勤め先の産婦人科からだ。

ああ勤め先。そういえば今日子が居なくなったとき、勤め先への確認はしなかったな。

そんなことを考えながら電話を取る。

「はい、春日です」

電話の向こうの声は切羽詰っている。

「春日英彦さんですね？実は先日の、吉崎今日子さんの手術のことで――」

電話の声は早口で捲くし立てる。それを聞いているうちに、自分の顔から血の気がどんどん引いていくのが分かる。

僕は思わず流しの方を見た。まだ赤黒い汁の残った鍋も見た。

腹の中で無花果が動いた。

— 終劇 —